

パブを全部閉鎖してしまうことはよいのに、パブに行くのにワクチン接種を要求するのは正しくないのだろうか？

(Could vaccine requirements for entering pubs be wrong, while closing pubs altogether is OK?)

トム・ダグラス (Tom Douglas)

当該の記事は、オックスフォード大学哲学科に所属する四つの研究所が運営するブログ Practical Ethics に掲載された表題の記事¹の紹介である。

本記事は、たとえばパブに行くことといった活動を、ワクチンを接種している人にも認められるような、「ワクチンパスポート」などと言われる措置の是非について考察している。本記事の議論によると、ワクチンパスポートは、ロックダウンのように人々の移動の自由を全面的に拘束するものではないが、そのかわりに、移動の自由と接種をしない自由のどちらを選ぶかを人々に迫るものだと考えることができる。ただ、そのような選択は、接種を促す社会的圧力を生んでしまい、実際には接種をしない自由を制限してしまうと考えられるので、接種をしない自由が移動の自由と比べ重要だと考えられる場合に限りワクチンパスポート反対論は擁護できる。しかし、実際に問題になる移動の自由は接種をしない自由よりも重大だと思われるため、ワクチンパスポートは正当化できるだろうというのが本記事結論である。

本文

パブに入る前に、自分が新型コロナウイルスのワクチンを接種したことを示す「ワクチンパスポート」を提示しなければならない、という要求が我々に課される事態を考えてみよう。このような類の要求は、議論を巻き起こすものだ。英国政府は、そうした要求の可能性を考慮しているということすら躍起になって否定している。しかしこれはある意味不可解なことだ。というのも、次のように言えるからである。まず、パブを全部閉鎖してしまうこと、つまり全員に一律にパブへ行くことを禁じることはそこまで問題含みでないように思える。しかし、そうだとすると、ワクチンパスポートを課すこと、すなわちワクチンを接種した人にもパブへ行くことを許可することでは、人々の移動の自由により小さい制限しかかからないのだから、パブの全面閉鎖よりもいっそう認められて良い筈なのだ。

パブを全部閉鎖してしまうことはよいのに、パブに行くのにワクチン接種を要求するのは正しくないのだろうか？

その問いに肯定的に答えるための一つの議論は以下のとおりである。まず、正当な理由が

¹ [Vaccine requirements for entering pubs | Practical Ethics \(ox.ac.uk\)](#). 当該記事の公開日時は 2020 年 12 月 4 日。

あって接種が出来ない人々がいると考えよう。彼らは身体的に接種すると危険な状態にあるかもしれないし、まだワクチンを受けられる順番が回ってきていないかもしれない。そのような人たちにパブでのワクチン接種を要求すると、彼らに過失はないにもかかわらず他の人よりも厳しい移動の自由の制限を課すことになってしまう。これは不公平と言えるだろう。しかしこの問題は、ワクチンが多くの人に利用可能になった時にその要求を課し、また接種に危険がある人々は例外とすることで回避できるだろう。

次により強固な議論として、身体的統合性 (bodily integrity) に訴えてみよう。まず前提として、接種をすることは身体への干渉であって、当人の同意なしで接種することはそのような干渉に対して個人が持っている権利、いわゆる身体的統合性への権利を侵害するものと考えられる。その上で、ある人が自分への接種に同意するということは、自分が持っているその権利を部分的に放棄し、接種が身体的統合性への権利の侵害にならないようにすることだと言える。しかしここで、その合意が妥当ではない場合というものがあるのではないだろうか。

たとえば、もし医師に「あなたの過去の医療記録を全部公開されなくなかったら接種しなさい」と言われていたら、あなたが自分から「接種をお願いします」と答えたとしても、身体的統合性への権利を放棄しているとは言い難いのではないか。というのも、医療記録を公開するという行為自体が、同意なしに行われたら別の権利の侵害になるようなものだからだ。そのため、この場合あなたの返答が意味しているのは「私は身体的統合性への権利を放棄します」ということではなくて、「あなたが私の身体的統合性への権利と私のプライバシーへの権利のどちらかを侵害しようとしているなら、まだ身体的統合性への侵害を受ける方がましです。どちらもしてほしくないけど」なのだ。そしておそらく、パブへ行くことにワクチンパスポートを要求することはこの事例に似ていると言えるのではないだろうか。つまりそれは、身体的統合性への権利と移動 (パブへ行くこと) の自由への権利との二者択一を迫っているのだ、と言えるのではないか。

だがそうだとすると、なぜパブの全面閉鎖はよいのにパブでのワクチン要求がよくないのかの説明にはまだなっていない。ここで最初の問いは次のように言い換えられる。パブの全面閉鎖のように移動の自由への権利を無条件で侵害することは許容できるのに、身体的統合性への権利と移動の権利の侵害のどちらかを強制的に選ばせることはよくないとして言えるのか？

これに答えるために、それぞれの自由の違いという形で考えてみる。ワクチン接種を課すことは、人々が持っていると考えられる「ワクチンを接種しない自由」を侵害するものと言えるだろう。そして、接種しない自由がパブに行く自由よりも客観的により重要であり、政府は前者を特別に配慮すべきだとしよう。

ここで大切なことは、確かに、パブを全部閉鎖してしまうよりも条件つきで許可する方が一部の人により大きな自由を与えるが、一方でそれはおそらく他の人のもつ接種しない自由を狭めもするだろう、ということだ。というのも、接種を条件にパブへ行くことを許可す

るような措置は、接種を促す社会的圧力を生んでしまうからである。パブに行く自由を認めることで発生するその圧力によって、接種しない自由が脅かされてしまうのである。そのため、接種しない自由がパブに行く自由よりも重要な場合は、たとえパブの全面閉鎖がよいとしても接種を条件にパブへ行くことを許可するのはよくないと言えるかもしれない。

しかし現実には、このようなワクチンパスポートはパブだけではなく、より広範な活動に用いられることになるだろう。その場合、接種しない自由と比べられるのは、より包括的な移動に関する自由、いうなれば「ロックダウンされない自由」だと言える。接種しない自由がロックダウンされない自由より重要かどうかはそれほど明らかではない。筆者としては、パブの全面閉鎖と違ってロックダウンは接種への圧力を生むことよりもより大きな害を個人の自由にもたらすものであると考えている。

もしそうであれば、パブの閉鎖の場合と違い、全面的なロックダウンがよいとされるのであれば、各人に対し接種という条件付きでロックダウンを解除することもよいということになるだろう。

(要約：京都大学大学院文学研究科 修士課程 吉田隼大)